

りす

佐々木寛子

一読した後、「東京のさみしい隙間」というフレーズが心に残る。野良猫の歌というより東京をうたった短歌と読むべきなのだろう。

百合の葉のささやきのなか死にちかき玉蟲の羽を蟻ら食みをり
松岡秀明

エロチックな空気とどこか嘘っぽい感じがミックスして、独特の雰囲気を出している。百合の葉がこすれる音と死に際の虫を食う蟻。ただ、蟻はタマムシの羽を食うのだろうか。あの色彩が欲しいので羽をだしたのだろうか、いかが。

どの道も川も心も北をむく切り立つ谷間の但馬の孤独
陰山毅

日本海に向く兵庫県の但馬地方は、なるほど川や道が北の方向に伸びている。北を指す磁石の針のように、ひたすら北を指す川そして道に孤独を見ているのだ。

われの字を真似る生徒の横顔のまじめ愛しく苦しかりけり
小川真理子

高校の教室に取材した一連中の一首。北原白秋↓木俣修、土岐善麿↓篠弘……。私を知っているだけでも、師の字を真似て自分の字体を作り上げた何人かがいる。ここは、教師の側から見たケース。「まじめ愛しく苦し」は真似される側の思いをうまく表現している。

熱風の圧力に今身構えてカンカン響く踏切に待つ

笹本碧

今では珍しくなった警報機がある踏切の歌。「熱風」とあるので、炎天下の踏切なのだろう。「身構えて」が、日常の中の一場面にふと浮かび上がらせて印象的。

自転車に跨りしまま迷ひ猫の張り紙を見てゐる君に
会ふ
宮原千晶

「残業の夜」二十首で「心の花賞」予選を通過して注目された作者である。この一首、君の輪郭がくつきりとした映像が目には浮かぶように作られている。「跨りしまま」は「跨れるまま」が正しい。

送り盆の夜を眠れるバスの席あの世この世を風は行き来す
倉石理恵

バスの席に座っているとき、ふとあの世の人と連絡したような、そんな気分になったの意味。歌としては、送り盆の夜でない方がよかった。

疎まれてジャンボ田螺の生き生けるしぶとき生を思
う朝なり
宮地瑛子

一連中に三首、ジャンボタニシの歌がある。「水際の草に紅濃き」妖しい卵を産みつける。奈良県庁の公式ホームページに、南アメリカ原産のスクミリンゴガイが八〇年代に日本に入ってきたこと、駆除方法等、詳しく載っている。全国的な「困ったちゃん」らしい。

何処にゆくとも言はず父出てゆけり玉音放送ありし
その夜
由田欣一

一九四五年八月十五日の思い出一連中の一首。六十余年経っても忘れられない十五歳の息子が見た父親像。